

Fast Food  
ファーストフード

P.83

休日の美しい朝だった。

1 人の裕福な男が、一彼を R 氏と呼ぶことにしよう。一庭で忙しくしていると、庭の壁の方から自分に話しかけてくる声を耳にした。

見知らぬ人が彼を見ていた。

「植物がお好きなようですね、」その男は言った。

「ええ、確かに、」R 氏は答えた。

「それならば、あなたが興味を持つかもしれないものを私は持っています。」

「何をお持ちなんですか？ガーデニングの道具を売っているのですか？」

「ガーデニングの道具よりもはるかにいいものですよ。一このスーパーパウダーです！

種を植えた後に、ただこの粉を少し土の上に振り掛けるのです。

種がどれほど速く成長するか、あなたはビックリしますよ。」

【ヒント】

You'll be amazed at how quickly the seed will grow.

<how + 形容詞/副詞 + S + V> = 「S がどれほど～に V するか」

その男は門を開けて庭に入ってきた。

彼は白い粉が一杯に入ったビンを持っていた。

R 氏は笑った。

「おとぎ話から出てきたものみたいですね！私がそれを信じるなんて、実際には思っていないでしょう？」

【ヒント】

You don't really think that I'm going to believe that, do you?

あなたは私がそれを信じるなんて、本当に思っていないでしょう？

「～ですね」と念を押す言い方を付加疑問文という。

肯定文には否定形で、否定文には肯定形で、付加疑問文の部分を作る。

「論より証拠です。ほら、お見せしましょう。

ここにいくつか種があります。

これらはスイカ、これらはイチゴ。

**P.84**

これらはトマトの種です。」

「それならば、種を植える時にこれらの朝顔の種も植えてください。」

「いいですよ！」

その男はシャベルを取り、槌を掘り返し始めた。

彼は種をいくつか植えた。  
それから彼は、粉を土にふりかけた。

**R**氏はこれを全て見ていた。

「これはジョークですか？」

「1分だけ我慢して下さい。」

「1分！たぶん1週間くらいでしょう！」

「いいえ、いいえ、見て下さい」

彼は地面を指差した。

**R**氏は、自分の見たものが信じられなかった。

新芽がすでに土の中から出てきていたのだ。

「凄い！何かのトリックに違いない！」

「トリックではありませんよ。」

私は、何も隠し持っていませんよ。

これらは、まさに私が植えたばかりの種と同じものです。

よかったら、触ってもいいですよ。」

**R**氏はそれらを触った。

本物だった。

